

## 33

## 江戸時代の「被膜胎」をめぐる社会文化

内野 花

大阪大学コミュニケーションデザイン・センター

江戸時代中期、18世紀半ばに賀川玄悦による回生術の発案をかわきりに、日本の産科学の技術は飛躍的に進歩し、同時期における世界の産科学技術と比較しても、類をみない発展をとげていった。従来、日本のみならず世界中の産科医学において是とされていた産椅の弊害を説き、かつ、胎児の性別の判定や性別の変転について述べられている呪術的な条項をひとつひとつ除外していくなど、産科学の「科学化」がおり、賀川流が日本産科学の主流となっていたのである。

江戸時代に編纂された産科学関連の医書には、「被膜胎」および卵膜、羊水、胎盤、墮胎・早産した児などに関する記述が数多くある。これらの記載内容から「被膜胎」とは被膜児を意味しているとわかる。被膜児とは、破膜することなく全被膜に被包されたまま胎盤とともに娩出された児、もしくは破膜したものの卵膜の一部が身体に付着した状態で娩出された児をさすが、「被膜胎」は特に前者の、全被膜に被包されて娩出された児のみで定義されている。「被膜胎」は、ほかに「ふくろ子」「囊胎」「囊子」「被服胎」「被胎」とさまざまに記載されているが、いずれにおいても、その形状はもちろんのこと、被膜児と判明したのちの迅速な破膜処置の必然性が説かれている。これらの記述は、医書のなかでも特に産婆を対象として編纂されたものに詳しいことや、日本各地に多様な被膜児伝説が残されていることから、日本での被膜児の認知度は医学界や民間を問わず、一定程度はあったと推察できる。しかし、『産家やしなひ草』『産後のこゝろえ』に、

千百人の中には、たまたま膜とれずに、生るゝ事も有べき筈なり。膜だにとれば、別に相かはらぬ人なれば、驚く事にあらず。愚なる産婦は、世俗の言に惑され、恥らひて、とりのぼしなどする者多し。

とあり、また『坐婆必研』『被膜胎の心得を説』の条項にも、

一家にてこの胃膜児を産たるもの、其異状に驚怖て之を捨たりと聞り。

と記載されていることから、江戸時代の一般社会においては、近隣の中国・朝鮮と同様、被膜児を悪いもの・避忌すべきものとしてマイナスイメージを付加していたことがよみとれる。一方、同時代の西洋社会においては、被膜児は「幸帽児」と呼ばれており、日本の「被膜胎」の定義とは異なり、卵膜の一部が身体（特に頭部）に付着して娩出された児としている。被膜児の卵膜は水難よけのお守りとして水夫たちに珍重されており、「幸帽児」はその名のとおり、成人後に王位や財宝を手に入れるという伝説までも残されたのである。

洋の東西で、このような民間における異なるイメージが生まれた背景には、死生観や宗教はもちろんのこと、時空の捉え方の違いがあることは明白である。しかし、日本の医学界においては、民間で信じられているこのようなマイナスイメージを取り去り、出産を医学として分析するため、『産科子玄録』坐草に、

力息陳疼窘迫ニ応シテ破水ヲ待タス、胎、胞衣、漿水共ニ娩スルモノアリ、是世ニ所謂囊子ナリ

として、医書には被膜児発生のプロセスを適切な分娩手順の失敗という観点から解説し、娩出後に児が無呼吸であった場合の救命方法を具体的に記載し、図を掲載することで、いかなる出産であれ最適な医療を実施できるよう、分娩介助者である医師・産婆に注意喚起を促していたのである。